

キリシタン文献の仮名文字の用法

— 《は》・《わ》の場合 —

鄭 炫 赫

【キーワード】キリシタン国字本、仮名《は》《わ》の字体、用字法

1. はじめに

従来、キリシタン文献の国字本を対象とした仮名文字の用法の研究は、他の写本や整版本に比べあまり多くない。それはキリシタン文献の国字本が古活字版であって他の文献とは違う性格を持っていることに起因する。そのため、先行研究ではその点を注意して仮名《は》の字体の使い分けを調べ、語頭以外のワ音に〈八〉の字体を用いたと言われる（注1）。また、安田章（1973.9）では、後期小文字本（平仮名小文字本）は前期大文字本（平仮名大文字本）より、仮名《は》の字体の使い分けの混用が激しいと言っている。

ところが、それらの研究がおもに辞書や字集の振り仮名を中心とし、また実際の数量的な裏付けが足りない点が問題点として指摘される。すなわち、仮名《は》において、辞書や字集の振り仮名を中心として調べると、助詞「は・ば」の例が殆どあらわれないため、助詞の使い分けを正しく証明しにくい面があり、また、振り仮名と本文との仮名字体の用法が異なる可能性もある。

ところで、小論では辞書以外の異なる版である平仮名大文字本2冊、平仮名小文字本4冊、写本1冊を選び、仮名《は》《わ》の字体の全例を調べて、当時のキリシタン宗教書の国字本において仮名文字の用字法の一断面をみることにする（注2）。中でも、異なる出版事情を持つ大文字本と小文字本を別に分けて扱い、両者の共通点や相違点に注目し、その原因を考えてみる。

小論で仮名《は》《わ》の字体に限って調査した理由は、まず仮名《は》の字体が大文字本と小文字本ともに他の仮名より多くの字体を使っている比較の対象として有効であると判断したからである。

2. 使用テキスト

* 平仮名大文字本

- ① 『どちりいなきりしたん』南欧所在キリシタン版集録 海老沢有道編集
(バチカン図書館蔵 刊行 1591 年頃、略語『ドバ』) 雄松堂書店
(1978.10)
- ② 『ばうちずもの授けやう』きりしたん版集成 1 (天理図書館蔵 1592
年頃、略語『授』) 天理大学出版部 (1976.4)

* 平仮名小文字本

- ③ 『サルバートル・ムンヂ』南欧所在キリシタン版集録 海老沢有道編集
(カサナテンセ図書館蔵 刊行 1598 年 耶蘇会版、略語『サ』)
雄松堂書店 (1978.10)
- ④ 『どちりな・きりしたん』南欧所在キリシタン版集録 海老沢有道編集
(カサナテンセ図書館蔵 刊行 1600 年 後藤版、略語『ドカ』)
雄松堂書店 (1978.10)
- ⑤ 『おらしよの翻訳』きりしたん版集成 4 (天理図書館蔵 刊行 1600
年 後藤版、略語『翻』) 天理大学出版部 (1976.4)
- ⑥ 『こんてむつすむん地』きりしたん版集成 5 (天理図書館蔵 刊行
1610 年 原田版、略語『地』) 天理大学出版部 (1976.4)

* 国字写本

- ⑦ 『吉利支丹心得書 上・下』珍書大観 吉利支丹叢書 (水府明德会彰
考館蔵 寛永五年 (1628) 写、略語『心』) (1928.11)

以下、小論の表記においては、仮名は平仮名を《》の中(《わ》、《は》)に入れて、各仮名の字体は各仮名の字母と判断される形を〈〉の中(〈者〉〈八〉〈盤〉〈王〉)に入れて表記する。ただし、字体が現行使用の形であった場合はその字体をそのまま〈〉に入れて表記する(〈は〉〈わ〉)。また、カタカナを/ /の中に入れて音韻の区別を示した。さらに、実例は「」の中に平仮名表記であらわす。それから、仮名《は》《わ》の字体の使い分けを調べる前に、大文字本は〈者〉〈は〉〈八〉・〈わ〉の字体が使われ、小文字本と写本はおもに〈者〉〈は〉〈八〉〈盤〉・〈わ〉〈王〉の字体が使われる(注3)ことを念頭に入れて、仮名《は》《わ》の字体を/ワ/音、/ハ/音、/バ/音、/パ/音別に分けて調べていく。

3. /ワ/音と/ハ/音

各文献の/ワ/音をあらわす字体の延べ語数は表1のようである。

表 1

/ワ/音								
文献	分類	〈者〉	〈は〉	〈ハ〉	〈盤〉	〈わ〉	〈王〉	合計
『ドバ』	語頭					46		46
『授』						4		4
『サ』						17	1	18
『翻』						28		28
『ドカ』						166	1	167
『地』						547	54	601
『心』						2	30	32
『ドバ』	非語頭	6 (5)	1 (1)	230 (48)		4 (4)		241
『授』				93 (31)		1 (1)		94
『サ』		14 (6)		72 (29)				86
『翻』		6 (3)		84 (30)				90
『ドカ』		82 (24)	12 (1)	436 (66)			2 (2)	532
『地』		3 (3)		516 (95)			7 (3)	526
『心』				1 (1)		4 (3)	185 (62)	190
『ドバ』	助詞		24	646				670
『授』			1	169				170
『サ』				167	1			168
『翻』				140	3			143
『ドカ』			16	790	11			817
『地』			7	872	306			1185
『心』		2		482	4	2	12	502

* 数字は延べ語数、() の数字は異なり語数

①語頭の/ワ/音をあらわす字体

上記の表1で語頭の/ワ/音をあらわす字体は、写本『心』を除いて主に〈わ〉を用いる（ただし、『ドバ』『授』『翻』は〈王〉の活字が用意されていなかったから当然〈わ〉のみ使用）。〈王〉は『サ』『ドカ』では少数見られるが、『地』では40例も見られる。

ここで〈わ〉と〈王〉どの使い分けを見るために、〈王〉の全例（54）と同じ語に使った〈わ〉例をあげると以下のようである。

「《わ》れ～（16/193）」「《わ》きま～（14/21）」「《わ》づか～（13/9）」「《わ》が～＝（4/292）」「《わ》すれ（3/3）」「《わ》たし～（2/0）」「《わ》き～（1/5）」「《わ》しる（1/0）」

（（ / ）の数字は（〈王〉の延べ語数/〈わ〉の延べ語数）、「」内の～印は後部要素が存在することとを意味、延べ語数の多い順に並べる）

ここで〈王〉の実例は殆ど〈わ〉の例にも見られ、語ごとに使い分けようとする試みや変字法のような例は見られないところから判断して、『地』は〈わ〉と〈王〉を混用して使ったと思われる。これは当時の資料を扱った先行研究（注4）や写本『心』に見られる結果から考えると、

当時〈王〉と〈わ〉が混用されて使われるのが一般的で、『サ』『ドカ』『地』のように〈王〉の使用率が低いのがむしろ例外的とも考えられる。

②非語頭の／ワ／音をあらわす字体

表1で見られるように、非語頭の／ワ／音は写本『心』を除いておもに〈八〉が使われ、当時の室町末期の文献と同じ傾向を見せる(注5)。ここで各文献の実例は、ハ行転呼の／ワ／音をあらわす例が各々『ドバ』43語212例、『授』28語82例、『サ』22語67例、『翻』20語36例、『ドカ』55語335例、『地』83語450語、『心』1語1例で全例の多くの部分を占め、本語と本来《わ》と書くところを《は》であらわした例が少し見られる。

ここで本来《わ》と書くところを《は》であらわすと言う例は、「ことわり」の例を「ことはり」のように書く場合を意味する。実際、このような類は『授』にのみ両形(「こと〈八〉り(9例)／こと〈わ〉り(1例)」)が見られ、他の文献は全部〈八〉の字体を用いている。このような例は、室町時代の古本節用集類から調べてみても、混用が見られる(注6)。これは本来《わ》であらわすべきところに《は》を使うことがキリシタン文献に限って見られたことではないことを意味する。

ところが、その実例をみると、『授』の「ことわり」の例を除いては殆どの例が統一的に〈八〉を用いていることは、土井忠生(1942.2)の指摘(注7)をもとにして考えてみると、語中・語尾の／ワ／音を《わ》の仮名遣と区別するため〈八〉を用いる方針があまりにも強かったから、本来《わ》であらわすべき所まで《は》を用いるようになったのではないかと思われる。しかし、逆に《は》の表記ではなく本来の《わ》の表記した例(「ことわり」「てい〈王〉う」「めい〈王〉く」「い〈王〉う」)やハ行転呼の／ワ／音を〈わ〉であらわした例(『ドバ』:「そな〈わ〉り(1)」「あら〈わ〉し(1)」「なり〈わ〉ひ(1)」)も少しは見られる。

非語頭の／ワ／音は〈八〉以外にも〈者〉〈は〉を使った例も見られる。これらの例は〈八〉の例とどういう関係にあるかを見るために、〈者〉〈は〉の例と共通する例があればともにあげる。

(以下の例: (／／) 内の数字は〈者〉の延べ語数／〈八〉の延べ語数／〈は〉の延べ語数、下線は〈者〉の使われた場合に限って連続活字、「」内の／は改行、～は後部要素が存在することを意味、並べはアイウ…順)

『ドバ』:「いつ《は》り」(1/1/0)、「い《は》ざる」(1/0/0)、「い《は》ひ」(2/7/0)、「い《は》れ」(1/3/0)、「うしな《は》す」(0/1/1)、「とら《は》れ」(1/3/0)

『サ』:「い《は》ざる」(1/0(「い〈八〉ず(1)」)/0)、「い《は》ひ」(1/0/0)、「い《は》れ」(2/3/0)、「まじ《は》り」(2/2/0)、「叶(かな)《は》ぬ」(7/0/0)、「わざ／《は》ひ」(1/0/0)

『翻』:「あ《は》れみ」(2/0/0)、「そな《は》り」(2/0/0)、「を《は》り」(2/2/0)

『ドカ』:「あ《は》せ」(1/0/0)、「あ《は》れみ」(3/1/0)、「いた《は》り」(1/0/0)、「いつ《は》り」(1/0/0)、「い《は》く」(1/0/0)、「い《は》ひ」(3/0(「ゆ〈八〉ひ(18)」)/0)、「い《は》れ」(5/1/0)、「い《は》んや」(3/0/0)、「うけあ《は》せ」(1/1/0)、「うけたま《は》りて」(2/0/0)、「お《は》しま〜」(0/12/43)、「おも《は》ゝ」(1/1/0)、「かか《は》らず」(1/1/0)、「かな《は》ぬ」(20/0(「かな〈八〉ざる・ず(28)」)/0)、「か《は》り」(6/1/0)、「こと《は》り」(11/2/0)、「さ《は》り」(4/0/0)、「すく《は》れ」(1/0/0)、「そな《は》り」(2/4/0)、「〜たま《は》ぬ」(1/0(「〜たま〈八〉ん(33)・〜たま〈八〉ず(16)」)/0)、「まじ《は》り」(2/0(「まじ〈八〉る(1)」)/0)、「よ《は》く」(2/0(「よ〈八〉き(2)」)/0)、「よ《は》り」(1/0/0)、「を《は》り」(8/4/0)。

『地』:「き《は》め」(1/12/0)、「〜たま《は》ん」(1/0(「〜たま〈八〉ず(36)」)/0)、「まじ〈八〉らず」(1/0/0)

上記の例から、語頭の／ワ／音を〈者〉〈は〉であらわした例は殆どが〈八〉であらわした例と重なる場合が多いことが分かる。また、その実例からも少数の例(『ドバ』で「いつ〈者〉り」(42ウ3)は次の行に「いつ〈八〉り」(42ウ4)が見られ変字法のように思われる。)を除いては変字法らしいことはみられず、混用して使っていると言える(注8)。

③助詞「は」をあらわす字体

表1を通してみると、助詞「は」はおもに〈八〉が使われる。ここで『地』は他の文献と違って〈八〉の代わりに〈盤〉の字体(注9)を助詞「は」に多く使っている。特にここで注目すべきことは、〈盤〉が小文字本にのみ使われた字体でもっぱら助詞「は」をあらわす専用仮名として使われたということである。一方、大文字本(特に『ドバ』)では〈は〉を少しの例外を除いて助詞「は」の専用仮名として使おうとする試みが見られる。

次は各文献の／ハ／音をあらわす例を表で示すと以下のようなものである。

表 2

文献	分類	〈者〉	〈は〉	〈八〉	〈聲〉	合計
『ドバ』	語頭	53				53
『授』		12	1			13
『サ』		11				11
『翻』		16	3			19
『ドカ』		86	12			98
『地』		240	3	9		252
『心』		62	2			64
『ドバ』	非語頭	10				10
『授』		8				8
『サ』		1				1
『翻』		7				7
『ドカ』		41	2			43
『地』		50				50
『心』		13	1			14

④ 語頭・非語頭の／ハ／音

表 2 を通してみると、語頭・非語頭の／ハ／音の場合、各文献は主に〈者〉が使われる。それに、〈は〉や〈八〉の例が少数見られる。ここで〈者〉の実例を示すと以下のようである。

(以下、おもに 5 例以上見られる例、「」内の～印は後部要素が存在することを意味、下線は連続活字、並べる順番は延べ語数の多い順。)

『ドバ』: 〈者〉なれ～ (11)、「〈者〉かり～ (5)」、「〈者〉や (5)」、「とり〈者〉なし (1)」、「らい〈者〉い (1)」、「御〈者〉つと (1)」

『授』: 〈者〉なし (3)、「〈者〉かり～ (2)」、「〈者〉や (1)」、「となへ〈者〉た～ (2)」、「御〈者〉からひ (1)」

『サ』: 〈者〉からひ (2)、「〈者〉づかし～ (2)」、「〈者〉やく (2)」、「らい〈者〉い (1)」

『翻』: 〈者〉からひ (3)、「〈者〉なるゝ (3)」、「〈者〉じめ (2)」「死し〈者〉て (1)」、「らい〈者〉い (1)」、「御〈者〉ゝ (1)」

『ドカ』: 〈者〉なれ～ (13)、「〈者〉かり～ (9)」、「〈者〉じめ (7)」、「〈者〉からひ (4)」、「とり〈者〉なす (1)」、「らい〈者〉い (1)」、「御〈者〉ゝ (26)」、「はな〈者〉だ～ (3)」、「さんち〈者〉さん [本語] (2)」

『地』: 〈者〉から～ (34)、「〈者〉じめ～ (29)」、「〈者〉や (く・し) (27)」、「〈者〉かな～ (27)」、「〈者〉なれ～ (18)」、「〈者〉らひ～ (12)」、「〈者〉かり～ (6)」、「〈者〉や (6)」、「〈者〉つる (5)」、「〈者〉なさ～ (5)」、「とり〈者〉なし (3)」「ひはう [誹謗] (7)」「御〈者〉からひ (5)」「はな〈者〉だ (4)」

『心』: 〈者〉なれ～ (9)、「〈者〉て～ (6)」、「〈者〉かり～ (6)」、「〈者〉じめ (5)」、「〈者〉たさ～ (4)」、「おもひ〈者〉かる (1)」、「御

〈者〉うかう (3)」、「御は」(1)、「はな〈者〉だしき (1)」

上記の例からも分かるように、非語頭の／ハ／音をあらわす〈者〉の例は、「はなはだ～」の1語を除いて、接頭語「御」の次にあらわれる〈者〉の例、複合語の例、字音語の例などで、それらの例は別に考えることができる。そうすると、語頭の／ハ／音をあらわす例と同じ扱いが可能になる。そのため、語頭・非語頭の／ハ／音をあらわす〈者〉の例に大きな違いが見られなかったと思われる。

また、〈は〉〈ハ〉の例も少数みられるが、〈者〉の例との関係を見るために、共に例を示すと以下のようである。

((／／) 内の数字は〈者〉の延べ語数／〈ハ〉の延べ語数／〈は〉の延べ語数、
下線は〈は〉が使われた例の連続活字、並べはアイウ…順)

『授』:「《は》るく」(0/0/1)

『翻』:「《は》かりなき」(1/0/1)、「《は》じめ」(2/0/1)、「《は》なはだ」(0/0/1)

『ドカ』:「《は》かりなき」(9/0/3)、「《は》じめ」(7/0/8)、「《は》なはだ」(1/0/1)「とり〈は〉なし」(0/0/1)、「し〈は〉じめて」(0/0/1)

『地』:「《は》かり～」(6/9/1)、「《は》じめ～」(29/0/2 (2例中1例は非連続活字))

『心』:「《は》じめ」(5/0/1)、「《は》らす」(0/0/1)、「はな〈は〉た」(0/0/1)

上記の例を通してみると、〈は〉〈ハ〉の例は少数の例を除いて殆ど〈者〉の例にも見られる例で混用して使っていると言える。中では、『地』では単調さをさけるための例(「〈は〉じめ」(10ウ14)の前後に4回も「〈者〉じめ」の例が見られる。)や語頭の／ハ／音には普段使われなかった〈ハ〉が「〈ハ〉かり～」の語に限って連続活字の形で使われ、非語頭や助詞「は」に使われる〈ハ〉の例と区別しようとする例も少数見られる。

⑤／ワ／音と／ハ／音をあらわす〈者〉

②④でとりあげた／ワ／音と／ハ／音をあらわす〈者〉の例は、各文献が位置による使い分けによって別の音(／ワ／音と／は／音)をあらわそうとする試みが見られる。

『ドバ』に見られる「い〈者〉ひ」「い〈者〉れ」「い〈者〉ざる」の

例は、／ワ／音あらわしいて〈者〉の前部要素に母音イがくる例である。これに対して語頭の／ハ／音をあらわす〈者〉の53例を調べると、〈者〉の前部に母音要素がくる場合は助詞「を」の例で9例みられる。また、非語頭の／ハ／音をあらわす〈者〉の10例は字音語の1例（「らい〈者〉い」）を除くと〈者〉の前部に母音要素がくる例はない。

そのため、このような特徴を、すなわち、文語体には助詞「を」や字音語を除いて、一つの文の中で母音が最後に来て意味の切れ目が殆ど来ないこと（注10）、『ドバ』では十分生かして／ワ／音と／ハ／音を同じ〈者〉で使って区別している。

『サ』『翻』『ドカ』では連続活字を用いて、非語頭の／ワ／音をあらわす〈者〉の例のときは、非語頭の〈者〉から連続活字としてあらわしている。しかし、語頭・非語頭の／ハ／音をあらわす〈者〉の例は殆ど〈者〉を連続活字に入れてないことが②④⑤の実例から確認される。さらに、『サ』『翻』『ドカ』では母音が〈者〉の前部にくる例は『ドバ』での方法を取り、殆ど連続活字を使っていないことも見られる。

このように、『ドバ』『サ』『翻』『ドカ』では、〈者〉を音別に分けて使おうとする試みがはっきりと見られる。

4. ／バ／音

各文献の／バ／音をあらわす延べ語数は以下の表3のようである。

表 3

文献	分類	〈者〉	〈は〉	〈八〉	〈盤〉	合計
『ドバ』	語頭	31 (2)				31 (2)
『授』		24				24
『サ』		4				4
『翻』		15	1			16
『ドカ』		58	9			67
『地』		97	2			99
『心』		11(28)	1(1)			12(27)
『ドバ』	非語頭	57(2)		(3)		57(5)
『授』		25				25
『サ』		17		6		23
『翻』		6	1	1		8
『ドカ』		36	14	15(1)		65(1)
『地』		36	31	104(1)		171(1)
『心』		25(21)	6(4)			31(25)
『ドバ』	助詞	120(4)	(4)	(4)		120(12)
『授』		50		(1)		50(1)
『サ』		60	1	26(2)		87(2)
『翻』			4	2		6
『ドカ』		25	59	111		195
『地』		12	43	227		282
『心』		47(52)	3	1(34)		51(86)

* () の数字は濁点無表記の例の延べ語数

①語頭の／バ／音

表3を通してみると、語頭の／バ／音（注11）はおもに〈者〉を使っている。ここで大文字本は〈者〉のみ使っているが、小文字本は『サ』を除いて〈は〉との混用が少数見られる。その実態を見るために、〈は〉の例に該当する〈者〉の例を共にあげると以下のようである。

（以下の（／）の数字は〈は〉の延べ語数／〈者〉の延べ語数）

『翻』：「《は》”うちずも〔本語〕」（1／5）

『ドカ』：「《は》”うちずも〔本語〕」（8／25）「《は》”うまん〔暴慢〕」（1／0）

『地』：「《は》”くたい〔莫大〕（1）」（1／1（「〈者〉”くたひ（1）」）、「《は》”んじ〔万事〕」（1／75）

『心』：「《は》”うちすも」（1／6）、「《は》”うちすも」（1／21）

上記の例からみると、『ドカ』の「《は》”うまん」の例を除いて、〈は〉の例はほとんど〈者〉と重なって使われ、少し混用は見られるが、〈者〉は／バ／音の語頭専用と思われる。

②助詞を除いた非語頭の／バ／音

表3を通してみると、助詞を除いた非語頭の／バ／音は、語頭の／バ／音の場合と異なることが見られる。それを見るために、各文献において〈者〉の出現率をみると、『ドバ』100%（62/62）、『授』100%（25/25）、『サ』73.91%（17/23）、『翻』75.00%（6/8）、『ドカ』54.55（36/66）、『地』20.81%（36/173）、『心』82.14%（46/56）である。

ここで大文字本は語頭の／バ／音のように殆ど〈者〉が使われるが、小文字本『ドカ』『地』は非語頭の／バ／音をあらわす〈は〉〈八〉の例が多く見られる。また、『サ』『翻』は、〈は〉〈八〉の例が『ドバ』『授』と『ドカ』『地』との中間ぐらいに位置することが窺える。

それでは、ここで〈は〉〈八〉の例が〈者〉とはどういう関係かを見るために、ともに例を示すと以下のようである。

（以下の（／／）の数字：〈は〉の延べ語数／〈者〉の延べ語数／〈八〉の延べ語数、（「」）の例は同一語であるが、清濁の異なる例）

『ドバ』：「叶《は》～」（0／5（「をよ〈者〉”ず（5）」）／3）

『サ』：「た《は》”かり」（0／0／1）、「及《は》”ず」（0／2／2）、「～〈八〉”かり」（0／0／3）

『翻』：「こと《は》”（1）」（1／0／1）

『ドカ』：「こと《は》”」（11／2／5）、「せすたさ《は》”と」（0／0／1）、「よろ

こ《は》”～”(1/3/0)、「をよ《は》”～”(1/5/4)、「をよ《は》ず」
(0/0/1)、「～《は》”かり”(0/0/4)

『地』:「いく《は》”く”(1/3/0)、「けん《は》”う”(4/5/2)、「こと《は》”
(20/7/38)、「し《は》”し”(1/0/0)、「そ《は》”むけ”(0/0/1)、「た
《は》”か～”(0/0/14)、「つ《は》”さ”(0/0/1)、「なか《は》””(1/
0/0)、「やい《は》””(1/0/0)、「よ《は》”るゝ”(0/1/2)、「よろこ
《は》”～”(1/0/14)、「ゑら《は》”～”(0/1(「ゑら〈者〉”～”(1))
/1)、「をよ《は》”～”(2/0/7)、「～《は》”かり”(1/1/18)

『心』:「こと《は》””(5/10/0)、「こと《は》”(4) (4/7/0)、「およ《は》”
～”(1/8(「およ〈者〉”～”(8)) /0)

上記の例をみると、『ドバ』や『心』は〈者〉の例が〈は〉〈八〉の例
と重なって使われる。が、『翻』『ドカ』『地』では〈者〉の例が〈は〉〈八〉
の例と重なる例が『ドバ』『心』より少なくなっている。さらに、〈者〉
が〈は〉〈八〉と同一語をあらわしたとき、その延べ語数が少ない場合
も見られる。これは、非語頭の／パ／音において、小文字本と大文字本
が〈者〉〈は〉〈八〉の混用の面ではっきりと区分されると言える。

③助詞“ば”をあらわす字体

表3を通してみると、助詞「ば」をあらわす〈者〉〈は〉〈八〉の使い
分けにおいて、大文字本と小文字本が完全に異なる傾向を見せているこ
とが分かる。すなわち、大文字本は主に〈者〉を使い、稀に濁点の無表
記の例として〈は〉〈八〉を使用しているが、『サ』を除いた小文字本は
主に〈は〉や〈八〉を使っているということである。

5. /パ／音

各文献の／パ／音をあらわす延べ語数を示すと表4のようである。

表4

文献	分類	〈者〉	〈は〉	〈八〉	〈聲〉	合計
『ドバ』	語頭	(68)	(1)			(69)
『授』		(18)	(1)			(19)
『サ』		13				13
『翻』		30				30
『ドカ』		69				69
『地』		5				5
『心』		11 (51)				11 (51)
『ドバ』	非語頭	(7)				(7)
『授』		(2)				(2)
『サ』						
『翻』		5				5
『ドカ』		33				33
『地』		22				22
『心』		4 (17)				4 (17)
『サ』	助詞	1				1

* () の数字は半濁点無表記

①語頭の／パ／音と非語頭の／パ／音

表4を通してみると、語頭の／パ／音と非語頭の／パ／音は、大文字本と小文字本ともに〈者〉がもっぱら使われ、その大部分が本語の例で、字音語・副詞・助詞の例が少数見られる。これは、／パ／音に〈は〉を使った例も大文字本に2例(『バ』:「御〈は〉しよん(1)」(65オ12)、『授』:「〈は〉らいぞ(1)」(2オ10))見られるが、大文字本と小文字本ともに〈者〉を／パ／音専用仮名として用いようとした(注12)と言える。

6. おわりに

以上、キリシタン文献の国字本を用いて仮名《は》《わ》字体の使い分けを音韻別に分けて調べてみたが、大文字本と小文字本は、仮名《は》《わ》の字体の使い分けにおいて、多くの共通点とともに少しの相違点を見せている。

共通点としては語頭の／ワ／音に〈わ〉、非語頭・助詞の／ワ／音に〈八〉、語頭・非語頭の／ハ／音に〈者〉、語頭・非語頭の／パ／音に〈者〉が主に使われることである。

相違点としては、語頭・非語頭／パ／音をあらわすとき、大文字本は〈者〉をおもに使うが、小文字本は〈者〉とともに〈は〉〈八〉を多く使っている点、非語頭の／ワ／音と語頭・非語頭の／ハ／音に使われた〈者〉の例の使い分けにおいて、小文字本は大文字本とは違って連続活字を用いている点、さらに助詞「は」の専用仮名(〈は〉と〈盤〉)の違いなどがある。

これは当時の文献が濁点を完全には振らない書記方式のもとで、できれば完全に濁点を振る書記方式を取ろうとしたキリシタンの試みとともに、大文字本と小文字本の異なる出版事情が深く関わってくると思われる。

当時の大文字本と小文字本との出版事情は新井トシの報告(注13)にもあるが、特に次の点が大文字本と小文字本との相違点をもたらした主要原因だったと思われる。即ち、それは、大文字本が金属活字を扱う製作者の浅い経験、限られた字体、少数の連続活字の環境であったのに比べて、小文字本は、製作者の豊かな経験、豊富な字体、多数の連続活字の環境であったということである。

こういう環境であったから、大文字本は限られた字体を十分生かす方

法を取り、小文字本は豊富な字体を生かした方法を取る結果となった。それが濁音仮名、一字体で別の音をあらわす方法、助詞「は」の専用仮名の相違をもたらしたと思われる。

また、もう一つ注目したいことは、大文字本では字体も少ないのになぜ完全に近いほど〈者〉に濁点を振っているのかという点であるが、それは写本なら普段連綿であるが、それに属すとも思われる連続活字が殆どなかったから〈者〉に濁音を振るようになったと思われる。もしそうしなければ〈者〉が、語頭・非語頭／ハ／音、語頭・非語頭・助詞「ば」の／バ／音、語頭・非語頭の／パ／音をあらわすようになり、とうてい無理だったと思われる。それとともに当時の日本人信者により正確にキリシタン文献を読んでほしいという目的が絡み合っていると考えられる。

今回はキリシタン文献の仮名《は》《わ》だけに限られた調査であったが、より範囲を広げて漢字や連続活字のことをも詳しく調査を進めて行きたい。

注

- (1) 高羽五郎(1951.6)によると、「…「は」についてだけこのような方法をとった字集編者の意図は、多分当時一般に「ハ」の仮名についてこのような特殊用法の傾向があつたのを借り用ひ、その範囲を明確にしたもので…」と言っているし、土井忠生(1971.6)や小島幸枝(1978.10)でも似た意見を述べている。
- (2) 小論は全例を対象とするが、『サ』の後半部に出る本語の説明や字集の振り仮名は除いた。また、『翻』も後半部に出る「たつときびるぜんまりやのらだいにあす」と字集の振り仮名は対象外とした。さらに、踊り字をも対象外とした。
- (3) 今野真二(1995.3)の『落葉集』に見られる仮名《は》《わ》の字体別使用状況は小論の小文字本の状況と似ているが、〈盤〉が使われてないことが異なる。
- (4) 今野真二(1994.2)(1995.2)(1995.3)、表章・後藤ゆう子(1979・1980)、菅原範夫(1979.3)などでは、語頭で〈王〉と〈わ〉が混用されていると報告している。
- (5) 安田章(1972.3)で扱った「相良蓮道の平仮名文書」、今野真二(1994.12)(1995.2)で扱った中世連歌資料、土井忠生(1942.2)や今野真二(1995.3)で扱った「落葉集」、高羽五郎(1951.6)で扱った「ぎやどるぺかどる字集」では、すべて語頭以外での／ワ／音を〈ハ〉がおもに使われることを言っている。さらに、安田章(1973.9)では、非語頭の／ワ／音には〈ハ〉が使われるという規則の上でキリシタン文献の混用を論じている。
- (6) 中田祝夫(1979.1)(1980.6)によると、「ことわり」「よわし」の例は

《は》であらわした例が《わ》の例より多く見られるが、「しわざ」「ていわう〔帝王〕」「いわう〔硫黄〕」「にうわ〔柔和〕」の例はすべて《わ》を使ってあらわしている。

- (7) 『落葉集』を取り扱った土井忠生（1942.2）では、「は」は両唇摩擦音の Fa に発音してゐたので、「は」その他の変体仮名を用ゐて写したが、これが語中語尾にあるときには wa と発音するのが普通であつたから、本来「わ」の仮名遣であるものと区別して、特に「ハ」の字体を用ゐた。その用法を違へた例も少なくはないが、正誤表の中で訂正したものもある位であるから、規則的に実行せんとしてゐた事が知られる。」（p.24）
- (8) 安田章（1971.2）の「恵信尼文書」や今野真二（1994.12）（1995.2）の連歌資料でも、非語頭の /ワ/ 音を〈ハ〉とともに〈者〉〈は〉を用いていると言う。
- (9) 今野真二（1995.2）では〈盤〉字体が係助詞「は」にもっぱら使用されたと言っている。
- (10) 伊坂淳一（1988）では「アハレー」「言ハー」の例をあげて、語末が母音音節で終わるような語形は、事実上、漢語か音便形ぐらゐに限られているから〈者〉の前で切り誤って読まれるというような可能性はまずない」と言っている。
- (11) 安田章（1972.3）や今野真二（1995.2）でも /バ/ 音は〈者〉が使われたと言う。
- (12) 今野真二（1995.3）では語頭・非語頭の /パ/ 音に主に〈者〉が使われると言う。
- (13) 新井トシ（1959.6）によると、「大型活字本出版時代には内外人ともに国字本印刷の経験がなく…活字も大きく、本文用の漢字、仮名の数も少なく、…小型活字本出版時代には大きく西欧本の編集方法が取り入れられている。…活字は小型になり、種類も多く…」と言っている。

参考文献

- 新井トシ（1957.10～1959.6）「きりしたん版国字本の印行について（一）～（六）」『ビブリア』9～14
- 〃 （1962.10～1966.10）「きりしたん版の出版とその周辺（一）～（七）」『ビブリア』23～39
- 伊坂淳一（1988.1）「藤原俊成の用字法・試論」『学苑』577号 昭和女子大学近代文化研究所
- 表章・後藤ゆう子（1979・1980）「世阿弥の平仮名書の用字法の特徴（上）」『能楽研究』第五号 法政大学能楽研究所
- 亀井孝 他2人（1983.11）『日本イエズス会版 キリシタン要理』岩波書店
- 小島幸枝（1966.1）『校本 どちりなきりしたん』創文堂
- 〃 （1971.5）『どちりなきりしたん総索引』風間書房
- 〃 （1978.10）『耶蘇会板 落葉集総索引』笠間書院
- 今野真二（1994.12）「中世の仮名文字遣攷一荒木田守武独吟千句を資料として一」『松蔭女子短期大学紀要』第10号
- 〃 （1995.2）「中世の仮名文字遣小考」『国語国文』714号
- 〃 （1995.3）「仮名文字遣いからみた『落葉集』—「は」「わ」の場合

- 一」『国文学研究』115 集 早稲田大学国文学会
- 菅原範夫 (1979. 3) 「大蔵流狂言資料に見られる平仮名用字法の諸相」『高知大学学術研究報告』第 28 卷
- 高羽五郎 (1951. 6) 「ぎやどるべかどる字集仮名字体」『ぎやどるべかどる字集索引』国語学資料 第 6 輯
- 土井忠生 (1942. 2) 「落葉集」『吉利支丹語学の研究』(旧版) 三省堂 (13～54 頁所収)
- 富永牧太 (1978. 4) 『きりしたん版文字攷』富永牧太先生論文集刊行会
- 中田祝夫 (1979. 1) 『改訂新版 古本節用集六種研究並び総合索引 (影印編・索引編)』勉誠社
- 〃 (1980. 6) 『印度本節用集古本四種研究並びに総合索引 (影印編・索引編)』勉誠社
- 安田章 (1967. 1) 「仮名資料序」『論究日本文学』29 号 (『朝鮮資料と中世国語』より引用)
- 〃 (1971. 2) 「仮名文字遺序」『国語国文』438 号
- 〃 (1972. 3) 「仮名資料」『国語国文』451 号
- 〃 (1973. 9) 「吉利支丹仮名遣」『国語国文』469 号
- 山田俊雄 (1980. 3) 「文字論に課せられた問題」『国語学』120 集

(チョンヒョンヒョク／早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻 博士後期課程 3 年)